

意見

水落 健治

シンポジウムの席上で、長倉氏、八木氏は共に、「フランチェスコ会の神秘思想におけるフランチェスコの人格の決定的な役割」について述べられた。長倉氏は、ボナヴェントゥラの神秘思想が貧者であり激しいエロスの人であるフランチェスコを禁欲者としてではなく霊的人格として捉える時に成立することを述べられ、八木氏は、スコトゥスの「このもの性」(haecceitas)の主張の背後には、人間の無力さ、神への到達の不可能性の感覚と同時に、有限の個体としての人間を「無限なる神との交わりの中」として捉える思想があり、この思想がフランチェスコの出来事・経験に由来することを主張されたわけである。

だが、フランチェスコ会の思想家の神秘思想とフランチェスコ自身との関係を問題にするときにはふたつのことが考えられなければならない。

第一の問題は、フランチェスコの人格の伝承の問題である。周知のごとく、フランチェスコは実践の人であり、自ら多くの著作を残したわけではなかったが、その人格的感化の大きさのゆえに、死の直後からさまざまな伝記が彼に関して書かれてきた。チェノラのトマスによる『第一伝記』、『第二伝記』、『奇跡の書』やボナヴェントゥラの『大伝記』などである。だがこれらの伝記の背後には、フランチェスコの死後、いまだ十分に形を整えていなかった教団をどの方向に導くべきか、の問題に起因する教団内部での政治的対立があり、したがって、これらに現れるフランチェスコ像も、その思惑の違いによって微妙に異なって来ている。加えて、これらの伝記は、聖者の列聖などに際して書かれた「聖者伝」*legenda*の文学形式と密接に関わっているだけでなく、ここに描き出されたフランチェスコ像は、さらに後代に成立した『小さき花』や『完全の鏡』などによって次第に理想化されて行くのである。したがって、フランチェスコ会の思想をフランチェスコその人と結びつけて考えるためには、フランチェスコ伝に関わるこの複雑な伝承史的問題を常に念頭に置く必要がある。

第二に、両者間の学問に対する態度の違いをどのように位置づけるか、という問題も本質的である。フランチェスコの主張の根本には「所有の放棄」があったが、彼においては、学問もまた放棄の対象とされていた。フランチェスコの神秘経験——らい者への接物が歓喜に変わったこと、聖痕の付与など——は、学問を放棄し、もっぱら貧困生活を実践することによって苦悩が歓喜に変わり新たな世界が拓かれる、という経験であった。それは、「言葉によらず範型 exemplar を生きる」ことによって獲得される実践の神秘経験なのであり、そこには、学問も、さらには、苦行・瞑想も入り込む余地はなかったのである。しかるに、彼の死後、教団は、托鉢・奉仕と並んで学問を自らの内に採り入れ急速に変質して行く。フランチェスコ会最初の哲学者ボナヴェントゥラは、33歳の若さでパリ大学の教壇に立ったし、ドゥンス・スコトゥスもまた長年オックスフォードの教師を勤めた。とするなら、かかる「学問の人」の神秘思想をフランチェスコの神秘経験の延長上で捉えることは、果たして正当であろうか。

われわれは、ボナヴェントゥラを、「フランチェスコの人格の伝統と当時の——特にパリ大学をめぐる——学的・政治的要請の狭間に立った人」と見ることもできよう。(そう理解するなら、ボナヴェントゥラ思想はたしかにフランチェスコの延長線上に見えて来る。) また、ドゥンス・スコトゥスにおける「アリストテレス的・ドミニコ会的神学の拒否」の中にフランチェスコその人の直接性の影響を認めることも可能かも知れない。しかし、いずれにしてもこの「学問と神秘思想」の問題の根底には「言語と神秘思想」の問題が横たわっている。フランチェスコ会の神秘思想の性格は、「神秘経験において言語が果たす役割」という観点からこれらを見直して見るときに、新たな相貌の下に現れるのではあるまいか。

意見

経験と解釈

加藤 武

1 「神秘」という用語

長倉久子氏は、E. ジルソンを援用しつつ、「神秘主義とは、本来理性によってとは